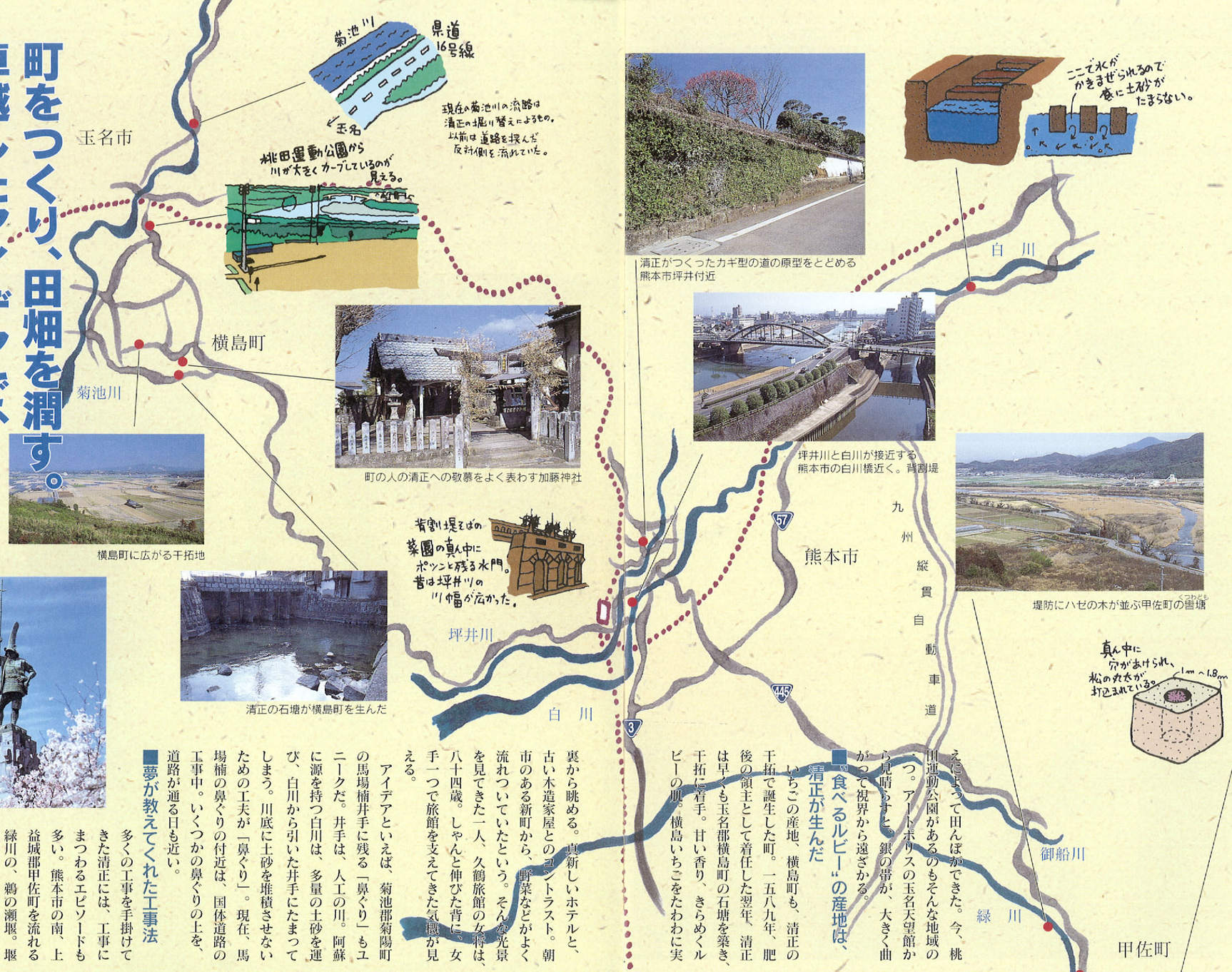
新・熊本散歩

加藤清正

緑川、白川、菊池川、坪井川―幾多の川の改修工事、そして有明海の干拓。一五八八年、肥後二十五万国の大名になり、一六一一年に亡くなるまでに、加藤清正がやってのけた土木工事の規模は、他に例を見ないほど大きい。彼が干拓をしたからこそ生まれた町がある。河川改修をしたからこそ、できた田畑も多い。清正の、壮大な事業の跡をたどってみた。

町をつくり、田畑を潤す。卓越したアイデアで、暮らしを守った土木の神様。



清正がつくった カギ型の道の原型をとどめる熊本市坪井付近

町の人の清正への敬慕をよく表わす加藤神社

坪井川と白川が接近する熊本市の白川橋近く。背割堤

堤防にハゼの木が並ぶ甲佐町の鼈塘（くつわども）

丸く穴を開けた石を敷いた甲佐町の鵜の瀬堰

横島町に広がる干拓地

清正の石塘が横島町を生んだ

■現代アートから望む、銀の帯

玉名市。植木から玉名市街へ向かう大動脈、高瀬大橋。その南で、菊池川は大きく西へカーブする。今からおよそ四百年前、菊池川は真っ直ぐ海へ注いでいた。流れを変えたのは、清正。当時この辺りは潟。稲を作ることなど思いもよらなかった。高瀬町は、清正の工事によって洪水から救われた。南の方には、掘り替えによって田んぼができた。今、桃田運動公園があるのもそんな地域の一つ。アートポリスの玉名天望館から見晴らすと、銀の帯が、大きく曲がって視界から遠ざかる。

■食べるルビー"の産地は、清正が生んだ

いちごの産地、横島町も、清正の干拓で誕生した町。一五八九年、肥後の領主として着任した翌年、清正は早くも玉名郡横島町の石塘を築き、干拓に着手。甘い香り、きらめくルビーの肌。横島いちごをたわわに実らせるこの平地が、つい四百年ほど前は一面の海。有明海に浮かぶ小さな島、それが横島だった。清正が築いた石塘は今も健在。清正の強い意志のように、塘は堅固だ。

石塘のそばにある加藤神社。毎年七月二十三日、熊本市の本妙寺で清正をしのんで開かれる頓写会（とんしゃえ）が、同じ日に、この神社でも催される。人々の清正への深い感謝を感じる。

■土木の神様はアイデアマン

「土木の神様」清正は、アイデアマンである。熊本市の坪井川の掘り替えもその一つ。今の坪井川は、熊本城を囲むように熊本市役所前あたりからゆるく西に曲がり、洗馬町を通り、熊本駅近くで白川と平行に流れている。

昔は熊本市役所前から南へ流れ、長六橋付近で白川と合流していた。外敵から守る堀は、城に付きもの。清正のユニークさは、わざわざ堀を掘る代わりに、川を掘り替えたこと。これで堀の役目と川の機能の一石二鳥を狙った。川は堀と違って、田に水を引くことができるし、町の中で、船を使って物資を運ぶことができる。坪井川は長く、城下町の流通を支えてきた。

白川と坪井川が道一本を隔てて接近する熊本駅近く。駅前の通りを、裏から眺める。真新しいホテルと、古い木造家屋とのコントラスト。朝市のある新町から、野菜などがよく流れついていたという。そんな光景を見てきた一人、久鶴旅館の女将は、八十四歳。しゃんと伸びた背に、女手一つで旅館を支えてきた気概が見える。

アイデアといえば、菊池郡菊陽町の馬場楠井手に残る「鼻ぐり」もユニークだ。井手は、人工の川。阿蘇に源を持つ白川は、多量の土砂を運び、白川から引いた井手にたまってしまう。川底に土砂を堆積させないための工夫が「鼻ぐり」。現在、馬場楠の鼻ぐりの付近は、国体道路の工事中。いくつかの鼻ぐりの上を、道路が通る日も近い。

■夢が教えてくれた工事法

多くの工事を手掛けてきた清正には、工事にまつわるエピソードも多い。熊本市の南、上益城郡甲佐町を流れる緑川の、鵜の瀬堰。堰がななめになっているので有名だ。かつてこの場は、何度堰を作っても洪水で流されていた。ある時清正は夢で、ななめに並んで川を泳ぐ鵜を見た。「これだ！」。激しい水の勢いをまともに受けないためには、堰をななめに作ればいい。今でこそほとんどコンクリートで覆われているが、清正の時代は、石の堰だった。一辺が一～一・八メートルもの、ほぼ立方体の石が並ぶ。

甲佐は、町の中を水路が通り、見事なコイが泳ぐ町。かつて柳の古木が並んでいたこの水路（大井手）も、清正が造ったもの。九州山地の原生林から流れ出る緑川は、洪水で流域の人々を苦しめてきた。水の被害を防いできたのが、鼈塘（くつわども）。遊水池だ。甲佐町にもこの鼈塘が九カ所ほど残る。町の高台にある岩鼻神社は、加藤神社とも呼ばれ、清正がここで工事の指揮を取ったという言い伝えがある。水利組合が清正を祭っているのも珍しい。

行く先々で、四百年経っても変わらない清正への感謝の念に出合った。田畑を潤すことは、人を潤すこと。清正は、ユニークな才知で人々の暮らしを守ってきたのだ。

DATA

■頓写会
熊本市花園本妙寺の大祭。加藤清正の一周忌に、本妙寺の三世、日遥が追善のために法華教の書写を行ったのが始まり。速やかに経典を書写することを「頓写」という。そこからこの名が付いた。今も有志の人々が写経を行い奉納している。

■豊後街道の杉並木
加藤清正が豊後街道に植えた杉並木。当時は熊本から阿蘇の二重の峠まで続いていた。並木はＪＲ豊肥線と旧国道57号がすっぽり入る幅。現在、熊本市の立田口から菊陽町あたりまで残っている。

■城下町づくり
農家が点在しているだけだった熊本城周辺を開発したのは清正。城の南に碁盤のような町を作り、商工業者を住まわせた。細工町、米屋町、呉服町など今でも当時の地名が残っている。

■玉名天望館
玉名市の桃田運動公園に立つ展望台。建築家高崎正治氏による、アートポリス参加作品。環境生命体としてのフォルムを創る建物からは市街が一望でき、休日は弁当を広げる人も多い。

■立岡堤
宇土市の南東約2.5kmのところにある立岡池の堤。桜の名所としても知られているが、この池も清正が造ったもの。また、清正はこの池に土砂が流れ込むのを防ぐため砂防ダムも造った。